神と人と信仰と

人から神になりし者

サークル　隠者生活
作者　鏡華和泉
絵師　ネモフィラ

人から神になりし者

信仰を得た者は、それがなんであっても神という存在となる。

石ころだって、蛙だって、人だって・・・

「人身御供？なにそれ」

いたいけな少女は僕の言った言葉の意味を尋ねる。僕はそれに答えることができない。

少女は僕が答えないせいで、何か妙な勘ぐりをしたらしく、痛いことなのと不安げに尋ねる。

「いいや、痛くなんかないさ」

嘘だ。僕はそれがとても痛いであろう事を知っている。

少女は怖いのかと尋ねる。

僕にとって少女が尋ねてくれることは救いだった。なんて言ったって、それ以外嘘をつかなくても良いのだから。

「いいや、全然怖くないよ」

全くの嘘だ。生け贄の道を進むのが、どれだけ怖いのか分かったものじゃない。

少女は儀式をしたら、友達と遊べなくなるのと尋ねる。

「いいや、きっとまた遊べるさ」

大嘘だ。人身御供すれば、生きていることは許されない。必ず死んでもらわなければならない。

少女は終わったらなまた僕と会えるのか尋ねる。

「嗚呼、会えるさ、きっとな」

嘘だ・・・嘘だ・・・嘘なんだ。どれも少女を逃げ出させないようにするための嘘なんだ。

僕は耐えられなくなった。今すぐここから逃げ出したい。そう思った時、ちょうど催事場が準備できたと襖を開けて言う父の顔を見た。

いつもの仏頂面だった父の顔が、どことなくうれしげに見えてしまった。

僕は父の言いに来た内容を理由にして、少女の質問をこれ以上受け付けないように、最後に一つ聞いておきたいことは、ないのかと聞く。

少女は少し悩む素振りを見せてから尋ねる。

「顔色悪いけど大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

勿論嘘だった。こんなことしてつらくないはずがなかった。だが、僕はもう嘘をつくしかなかった。

僕と少女の会話が終わったのを見計らって、母と叔母が入ってきて、僕と父は乙女の着替えですよと追い払われた。

父は少し不満そうだったが、母の自慢の座布団である父には抵抗するすべはなかったらしく、催事場に向かった。
一方の僕は、息苦しい部屋から解放されたと、少し離れた部屋で一息ついたが、胸のわだかまりは一切軽くなることはなく、逆にわだかまりは大きくなった。

シャランと鈴の音がゆっくり近づいてくる。
開け放たれた扉からは、白装束に身を包んだ少女がやってきたのがよく見える。
シャンシャンとだんだん母の鳴らす鈴の音は近づいて、ついに扉をすぎて祭壇に向かう。
少女は目隠しをしていて、母の鈴の音と持っている紐を頼りに、進んできている。
そして、祭壇の前にまでやってきたとき、ついにその目隠しは解かれて、目の前には祭壇が控える光景が目を覆っただろう。少女はチラリと僕を振り返った。
はっきりと声はなかったが、『うそつき』と唇が動いたように見えた。
これは僕の罪悪感からの幻覚なのか、本当のことかとかは分からない。でも、確かに僕は、うそつきという誹りを受けた。

父が、紐を少女の首に巻き付け、縛り上げる。もがく声はか細く。ばたつく足少女の足は、次第に力を失っていく。そこまでで僕は目をそらした。
しばらくして、ビチャビチャと言う水っぽい音がした頃、顔を背けていた僕は、ゆっくりと祭壇の方へ視線を戻す。

一息つく父と、少女を祭壇に置いて、その胸に刃を突き立てる母、どちらも見ていて寒気がした。
だが僕はうそつき。逃げることも、不快感に声を大にして叫び、暴れる事もできず、ただ小さくごめんねとしか言えなかった。
ただ僕はこのとき、嘘を二度とつかないと心に誓った。普段なら難なく破ってしまいそうな誓い。だが、ここまでの罪の意識が僕を縛り上げている為、この誓いだけなら守っていけそうな気がした。

そこからの儀式の記憶はない。
少なくても、家族の反応が冷たくないようだから、儀式には参加しきったらしい。

そして、僕はあの儀式からいわゆる神様という奴が見えるようになった。ただし、その姿は儀式で生け贄になった少女だった。

触れることもできないし、僕以外は見えていないらしい。
始めは驚きと警戒、次に不安と悔恨、そして受け止めて消化する。そのステップが終わって幾日かすぎた頃、少女は僕に声をかけた。

『ねぇ、私が死んだことで、何か幸せはあった？』

少女は少し意地悪そうな顔に、表情を歪めて僕に聞いた。
昔の僕なら勿論だとでも言っていたのだろう。しかし、

少女の死を乗り越えてしまった僕は嘘をつかない誓いがあった。

「なにもなかったよ。一切良いことは起きなかった」

僕がそう答えると、少女はそっぽを向いて言った。

『・・・普通、こう言うときに、嘘をつくべきだったんだよ。お兄ちゃん』

その言葉と共に、妹であった少女は姿を消した。

それから僕は彼女を見ていない。

ただ、父は首をつり、母は自らを包丁で刺して死んだ。

存在は知覚できたが、その姿は一切さらさずに、彼女は復讐を完了した。

だが、僕だけは彼女の復讐の対象にならなかった。いや、僕を見続ける事こそが復讐なのかもしれない。